

## 家族理論を枠組みとした量的研究 —家族エコロジカルモデルにもとづいた家族機能の定量—

法橋尚宏 (神戸大学医学部保健学科小児・家族看護学)

### 1. 量的アプローチによる看護研究と家族看護学

看護研究を行うにあたって、研究目的を明確にし、その目的に適した研究デザインを選び、倫理的に問題がないように配慮する必要がある。典型的な量的研究としては、質問紙を測定用具とした実験群と対照群の横断研究があげられる。量的研究では、数値で表せるものをデータとし、統計解析の結果から対象の特徴を捉えることで、客観的なエビデンスにもとづく知見が得られるという長所をもつ。これらは、家族看護学における量的研究にもあてはまるが、家族看護学では家族という集団を対象とすることに留意する必要がある。

筆者は、家族看護学とは「家族という集団を対象として、家族の機能とセルフケア能力を高める援助を行う実学」と解釈している。そして、集団機能のひとつとしてみた家族機能の定量、機能不全家族への家族看護介入をライフワークとして取り組んでいる。

### 2. 家族エコロジカルモデルにもとづいた家族機能の測定用具

家族という集団を理解するために、その特性を説明する枠組みとしていくつかの家族理論が提唱されている。その中で、家族エコロジカルモデル (Bronfenbrenner) では、家族を取り巻く環境を microsystem, mesosystem, exosystem, macrosystem からなるシステムとしてとらえ、家族と環境との相互作用を分析する生態学を基礎としている。家族機能尺度のひとつである FFFS (Feetham Family Functioning Survey) は、この家族エコロジカルモデルにもとづいて Feetham らによって開発され、「社会コサブシステム (社会のサブシステムという意味) コ家族」という入れ子式環境の中で、それぞれの関係を評価する。したがって、「家族と家族員との関係」のみならず、「家族と社会との関係」と「家族とサブシステムとの関係」をも測定できる。この翻訳版にあたる FFFS 日本語版 I は、27 項目の自記式質問紙であり、信頼性と妥当性を検証した上で筆者らが開発した (家族看護学研究, 6 (1), 2000)。

筆者は、機能不全家族とは「家族機能にかかわる役割行動が期待どおりに履行されず、家族全体として問題を生じている家族」と定義している。筆者のこの定義と FFFS の得点方法とは一致しており、FFFS では現在の家族機能 (a 得点) と理想の家族機能 (b 得点) の差から家族機能充足度得点 (d 得点 =  $|a - b|$ ) を算出する。そして、家族機能充足度得点 (d 得点) で家族機能不全の程度、重要度得点 (c 得点) で家族看護介入の優先度を明確にできる。

### 3. FFFS 日本語版 I を用いた家族機能の量的評価の具体例

FFFS を用いた研究のうち、小児家族看護学に関する筆者の研究を紹介する。入院病児への両親の付き添いが家族機能におよぼす影響 (家族看護学研究, 9 (3), 2004) では、母親の付き添い期間が 7 日以上の子どものほうが「家族と社会との関係」における家族機能充足度が有意に低いことなどが明確になった。さらに、仕事を休むこと (経済機能)、自分の時間がもてないこと (休息機能、娯楽機能) に対する家族看護介入の優先度が高いことが明らかになった。

また、ファミリーハウス (家族宿泊施設) を利用する母親からみた家族機能の日米比較 (家族看護学研究, 10 (1), 2004) では、「家族とサブシステムとの関係」における家族機能充足度が日本のほうが低い傾向などが明らかになった。これは、家族員とそれ以外の人々との間に明確なバウンダリーがあるという日本の家族の特徴 (ウチとソトの概念) と関連していると考えられ、文化背景を考慮した家族看護介入を考えていく示唆を得ることができた。